

# これからの日本がなすべき

## 美的な文化力の涵養と発信

経済、文化、宗教など、世界が混迷する中で

日本が果たすべき役割が求められている。

世界の文明をさまざまな形で

吸収してきた日本が今後なすべきことは何か。

川勝平太 静岡県知事と

日独文化研究所長の大橋良介氏が

京都産業大学世界問題研究所長・

静岡県補佐官（対外関係担当）の

東郷和彦氏を交え、

「日本の普遍性を問う」を

テーマに語り合った。

美的な力で覇権主義と対峙

これまでの世界文明というものを

いろいろな形で受け入れ、どちらと言えば海外の文明に憧れる国であったものが、逆に「憧れられる立場にそろそろなつてきました。問題はその日本がこれからどういう発信をしていくのか

にある」とおっしゃっていますが、大橋先生はどのように思われますか。

**大橋氏** 中国や欧米の文明を取り込み終わった日本の文明が、今後どこへ行くのかという問い合わせ、ますます大事になってきます。その場合、知事も私も

「美」という観点を入れています。その力でグリグリと覇権主義的に国を拡張していく方向とは違うものです。問題は覇権主義の力に対して美的な力がどう

なります。それが問題になることもあります。しかし世界の諸潮流に接するなど、日本文明はナショナリズムという偏狭な観点ではなく、もつと自覚にもたらすべき

学ぶ姿勢を持っています。その代わり独自のものを展開する姿勢は稀薄となります。文化力の涵養と発信という観点では、それが問題になることもあります。しかし世界の諸潮流に接するなど、日本文明はナショナリズムという偏狭な観点ではなく、もつと自覚にもたらすべき

力の問題については、幕末の日本人は欧米を列強と見なし

ました。むき出しの力の存在と見たのです。欧米は自らを「文明」、欧米以外を「野蛮」と認識していました。日本から見れば

「力の文明」です。

国が整えるべき体系について、国際政治学者の高坂正堯先

行つたときには、ドイツの哲学

は軍事力を、戦後は経済力を發揮して大国になりました。しかし、どちらも限界に突き当たり、浮上したのが文化の力です。文化の力で人々を惹き付けることができれば文明になります。

**東郷氏** 日本の学生がドイツに行つたときには、ドイツの哲学

生は、力の体系・利益の体系・価値の体系の3つが三本柱だとおっしゃっています。力の体系は軍事力、利益の体系は経済力、価値の体系は文化力に置き換えられます。日本は、戦前期は軍事力を、戦後は経済力を發揮して大国になりました。しかし、どちらも限界に突き当たり、浮上したのが文化の力です。文化の力で人々を惹き付けることができれば文明になります。

文化に関する日本人の感性的な意思、情意はどういうものか。例えば富士山は噴火するから恐怖され、信仰の対象になります。たが、極めて美しい存在なので芸術の源泉にもなりました。ユネスコの無形文化遺産になつた和食は四季折々の旬の食材を揃えて、食材に応じて盛皿にも配慮します。このように日本では自然についても、生活文化についても美への傾斜が強いと言えます。

ヨーロッパが重視するのは真理です。真理は一つです。美は真に勝るとも劣らぬ価値であり、しかも多様です。そのような美

とは何かということを素直に受け入れています。それが今、両先生がおっしゃった日本からの新しい発信の力になつてきている

対峙するかです。これからの日本がなすべきことは、この美的な文化力の涵養と発信に尽きると思います。

例えば、ドイツに中国からたらしくさんの哲学留学生がやつてきます。中国の留学生は西洋哲学を受け入れる根本姿勢として「西洋にアリストテレスがいるなら、こちらには孔子がある」といった意識です。中心はねば、という姿勢です。日本人はまず自分をなくし、相手から

内容を持っていると思います。

月並みな表現ですが、日常世界に埋もれているものにこそ、本

当の意味での伝統の力が含まれていると思います。だから、日本の美的感性の力、「慈しみ」の意識は今後大きく開花する可能性があると思います。

**知事** 文明には憧れの感情が伴います。だが、美しいという感情には悲しいばかりに「慈しむ」という情意の働きがあるよう思います。

力の問題については、幕末の日本人は欧米を列強と見なし

ました。むき出しの力の存在と見たのです。欧米は自らを「文明」、欧米以外を「野蛮」と認識していました。日本から見れば

「力の文明」です。

国が整えるべき体系について、国際政治学者の高坂正堯先

平安朝文学では「はかない」という言葉がよく出でます。「はない」は「はか」（涯、果て、際）がない、ということのようです。

平安朝文学では「はかない」という言葉がよく出でます。「はない」は「はか」（涯、果て、際）

玉、宝玉です。それに対して日本は水。つまり、宝玉という永劫的なものではなく、さつと流れる透明な水に日本人は美を感じていました。

平安朝文学では「はかない」という言葉がよく出でます。「はない」は「はか」（涯、果て、際）

がない、ということのようです。單にとりとめがないのではな



川勝平太

静岡県知事

哲学者・日独文化研究所長  
おおはしりょうすけ

大橋良介氏

東郷和彦氏

世界が認める日本の文化力



京都産業大学世界問題研究所長  
静岡県補佐官(对外関係担当)

東郷和彦氏

1945年長野県生まれ。京都産業大学教授・世界問題研究所長。外務省で北方領土交渉ほか対ロシア関係を中心に勤務し、2002年退官。外国の大学で教え始め、アジアの歴史問題等を研究。日本の思想や景観問題にも関心。10年より世界問題研究所長、11年より静岡県補佐官(対外関係担当)。近著に『戦後日本が失ったもの』(角川書店)、『危機の外交』(角川書店)など。



哲学者・日独文化研究所長  
大橋 良介氏

1944年京都府京都市生まれ。目独文化研究所長。1969年京都大学文学部哲学科を卒業。1973年ミュンヘン大学哲学部で哲学博士号取得。1983年ヴュルツブルク大学でドイツ大学の教授資格(ハビリタチオン)を日本人で初めて取得。

京都工芸繊維大学教授、大阪大学教授、龍谷大学教授等を歴任したあと、ケルン大学、ウイーン大学、チュービンゲン大学等の客員教授を経て、2014年より現職。著書は哲学専門書のほかに、「日本的なもの、ヨーロッパ的なもの」(新潮社、増補版は講談社)、『京都学派と日本海軍』(人文書院)など。ドイツ語での出版も10点を数える。



静岡県知事  
川勝 平太

1948年京都府京都市生まれ。1972年早稲田大学政治経済学部を卒業。1975年早稲田大学大学院経済学研究科修士課程修了。1985年オックスフォード大学博士号取得。

早稲田大学政治経済学部教授、国際日本文化研究センター教授、静岡文化芸術大学学長を経て2009年より現職。著書に『日本文明と近代西洋』(NHKブックス)、『文明の海洋史観』(中公文庫)、『鎖国と資本主義』(藤原書店)など。

く、はつきりした実体性がない  
という空虚感でしょうか。それが  
が鎌倉仏教の影響を受けると  
「無常」という自覺的概念になり  
ます。平安朝と鎌倉時代では時  
代の感性が変化しています。そ  
こから「空の情意」という西洋哲  
学では表現されたことのない言  
葉が出てきます。

「同情」です。同情はこちらが安全地帯にいて可哀想な相手に上から目の線で手を差し伸べる姿勢です。日本人の「悲」はそんなものではなく、一緒に立場に降りることです。困っている人と一緒になつたら自分も溺れることもあるでしょう。しかし、そういう計算を取り扱つて出てくる

「空の情意」というものがあります。そこから湧き出てくる情意に、「はかなさ」「無常」「覺悟」といった感性の究極があります。そこにはキリスト教の「愛」とは違つたものを感じます。「玉」でなく「水」を美しく感じる方向には、そんな奥深さがあると思つています。

**知事** 平安朝の「源氏物語」はもののあわれの文学だと言われます。平安朝の「あわれ」が鎌倉時代に「あっぱれ」へ変わります。はかなしを無常として受け入れて諦観し、あわれが天晴れに転じたのは、いわば短調から長調への転調です。他力本願で阿弥陀淨土への救済を願う心が武士の自力本願の心に変わったのです。

す。こうした情意の変化の行き  
つく先が室町時代に落ち着いた  
と思います。そのシンボルは  
「花」です。

葉ですが、同時に、時分の花、きことの花についても述べています。若いときに咲く花は時分の花で、精進・稽古を重ねていれば、老年になつてもまことの花は失われないと世阿弥は書いています。これは江戸期の芭蕉に受け継がれています。

私は日本の美への情意は「花」にシンボルを見出したように思

いります。花は水と日光がつくり出す地球自然の命、緑なす植物の美しさの結晶です。人を惹き付ける、虫を惹き付ける、小鳥を惹き付ける。花に日本人は美のシンボルを見出したのではないでしょうか。玉のような無常・非情のものではなく、花と散る、花のように生きる、花のような生

涯を生きる。これが私は日本人の持つている美の文明の特色だと思います。花の文明です。花の文化は文明たり得ます。

日本は東洋の知恵を知つたうえで、花の命に人生觀を仮託しました。それが生まれたのは、15世紀前半、東洋文明がほぼ入りきった室町時代です。日本人は人生觀を花に集約した、つまり

芸術にしました。その意味で日本は芸術の国です。美の文明への志向を持つています。そしてすべての基は自然です。

富士山の世界文化遺産登録において、当初、日本の登録申請名は「富士山」でした。しかし、ユネスコ世界遺産委員会は、それでは富士山の価値が分からぬので「sacred place and source of artistic inspiration」という一文をつけ加えるように提案してきました。山塊である富士山を「信仰の対象・芸術の源泉」という表現にするように国際的な公式の場で外国人から言われたのです。ユネスコ委員会はイスラム教、キリスト教、仏教、ヒン

**文化力の可能領域が広がる**  
**大橋氏** 世阿弥の『花伝書』を  
ドイツ人と独訳しています。  
『風姿花伝』は有名ですが、あれ  
は世阿弥が父親の觀阿弥の  
語つたことを書きとめて整理  
したもので。『花伝書』は世阿弥  
が自身が老年になつて、自分  
の芸を子孫に伝えるために書い  
た秘伝書です。

類あります「芸を始めた頃の初心を忘れるな」「芸が達者になつたときも初心を忘れるな」「老年になつても初心を忘れるな」であります。特に3つ目がすごいです。老年になつた世阿弥は権力者の庇護を失つて不遇のどん底にいきますが、かつての「花」の時代よりも格段に深まっています。だから「老後の初心を忘れない」と述べたのです。そこの人間のコンパッションの深い表現を目に

潤滑油になることも予想されま  
す。日本のサブカルチャーが世  
界的に人気を博すことと思いま  
し、合わせて考えてみることが出来  
ます。

**東郷氏** 大橋先生のコンパツ  
ションに関する話、そして知事  
の花の話を合わせると、日本の  
進むべき道が少し見えてきた気  
がします。

することもできます。「空の情意ですね。コンパッショ�이」は、小さきものを「慈しむ」という感情です。仏教概念の「慈悲」と結び付きます。そしてその「悲」の英訳が「コンパッショーン」です。だから日本語の「美しい」「慈しむ」は、仏教とキリスト教の根本概念につながる深みを持

危険が迫っています。そういう時こそ、政治や経済での対応とは別に、知事のおつしやるような「美の自覚」「生死の自覚」「心の自覚」といった思想が出てくるべきです。私自身もそういう方向に「文化力」の可能領域が広がっていると思います。